芳秋叢稿

下

へ 4
2319
2

戀歌

戀

志なのなる木曽路の麻きぬおるはたのあやしく物を思ふころ哉

忍恋

こよろきのいそはにはのまかくれてやなれなゝらむの一かたてにのへる浪のなれ

恨

あたまた語にあかしつゝきて河なくも山河なうらみを山へんにおふ

恨恋

かつみあの色とる衣ほころびてうらもとさきつゝうるまさえもわ

暁恋

あのたきつるるの、あかるまきてあはれと秋まくあつ、たはまして君

旅恋

うつみるの旅のちきりなる椎の葉めいひの色なくそ、つる哉

祈恋

夢船川岩ゝなるうらやゝまつ、ねのひさいつのかなそん

変約恋

うなら〻といとゝ心のうらうらに、こゝろのまことたなるそらん

寄玉恋

天つそらゝ雲のあきらの玉よりもとりわけたまくしつゝろの

題しらず

とたのより今うまそうれ　やいつも琴をく寄とめなるらん

冨貴のうたゝ山そはの砂ゝたきあとめのたまと寄のそもそれし

ゆゝのあもたゝなるぬ夜のよねやの扇となるまゝを恋る

人ちまたゝうたゝあ　ゆゝ人より法ゆわそらしぬなて　この花

こゝろに山をよみめぐらしつゝ海山をよみめぐらしつゝ

雜奇

雪

わたつみのおもひのくるしあまりてうきものとなるゆきん

雨

うきくもにあめふりかゝるよしといふ雨のおとみきくゆる

曉

大空の鶴のなくねにあけぬるかあきわたるらん

晝

[illegible]

夕

[illegible]

萩

[illegible]

山

[illegible]

雨中山

[illegible]

名所野

[illegible]

瀧

[illegible]

海路

[illegible]

滄海雲低

沖とおくおりあるそらのうらわかそをそむくうみのなもはてなきかな

浦松風

ひとつのまつふきわたるなみのおとたかのゝ沙やうたらん

海眺望

ふるてらの海より出る月のかげふじの雪山

海口

塩ひるあれてうきもしらぬものゝ人を今はたのもし

市

ことの葉のうるまのうちの市にかはもあるもあらねるのふ人もなし

名所市

海なる堺のうらに海人のたく舟

閑中燈

ひとりあてふしよむ窓のともしびに小むらの人はのもそえたる

古寺殘燈

鐘なくそなりもたかき山おろしに法のともしび

山家

あしびきの山のをちこちかなたにもこゝとゝたる世なりけり

山里の庭の苔むし松ふりてたゝぬところおもしろき哉

山家水

山の端の岩もる水もをちこちにかたりてをるやとの孔

東松山

ゝなるをとをとゝなりとゝなりをとをとゝなりをとゝなん東の松山

名柄川

苔敷のしまりゆくもなるのうら川うとゝいふとゝろきはのあしとりきり

高師濱

布もゝるる音も高師の濱風に松のをうゝのちあらふ浪の孔

有明山

あまつ神ゝたまをかりをを久方のゝあるあふくほりあきの山

櫻井里

花の香の廻ゝしめてたゝのゝ御ゝてのかきさゝるゐの里

松

久方の雲井の空を抜る高砂の松はみどりを誰ぞ問ん

庭松

うちむかふ松のこずえもさもとりぬ友と我とのみ

閑庭松

我宿をとりむかふかの庭なる松のこずえもさびしかるらん

とふ人のあとものこらぬ苔の上に今宵松をぬれぬ人なし

社頭松

ちはやぶる神のみ代よりゆる種を神やまきけん

翠松遠影

一むらの松はるかなる山の端にこずえもゆるやとの月

松歴年

この里に何のまつ松ぞとりてあらむ年をまつ人色まさりけり

竹

世をなのもとの心ぞとられぬ仏の学をとむべき竹なりけり

巖苔

古塚のふるぶるしの苔むして誰とも言ぬあとぞ悲しき

朝鶯

あつかはしき日の長に高砂の松をなびかしたかぬなるる

晴天鶯

澤水のわらはすらんに長閑にて鶯たつ鳴るたる

雪鶴

ゆもつの雪深の芦の折ふしなる月や出らん

蘆間鶴

神代よりなほそなもつらんたゝ鶴ふよあ一声たつ鳴なる

牛

あまきまきつのそなつの笛の音をもつ一刀そや牛は今のへるらん

蜂

蜂は蜂のあまきそなはとふとうもつ人なるふれさしかをそなる

蜘蛛

さゝのいとのいともそらはぬやとのかしをおのまの長ふまの長ふ人歌

胡蝶のつら

そなそのそなつるこてのつらそれを蜂のはさそなはそなれかつれ

琴

久方のあまつそらなる琴にもあるかなかの音

枕

よもすがらつまをまちかねおもへども枕ばかりぞかたしきにける

岐阜提燈

八千代の花よりもなほひのうちまさんわが涼しうきるる

電氣燈

夏にとれぬをとるとおもひしいなびかまのつきもはてぬ雲にかくれぬ

金鑛

きりもむらくいとあるの中にさらに花もさらにさらに光なりきり

書籍館

ちたちまいるかまのうちにのおくにかれ人のふむへきこちもあるかきに枕

宝閣茶味清

是我の山とうに水のこうにおとこれこうよへそねのもたに琴

花火を見て

ちちちちかれのはつかへのわらにさらに花を彩のほよりをを花かりかり

河内国縄手の亀の甲とて名ある笠を
うちつけたりつるを見たりかれなん笠のうへにかきまはしつる亀
蔵六園のあるじ亀のうたちきる石を
題して歌をあたらしくこと
第代をうつしとどめし亀石のなれるすがたはあらはまつのきり
大徳寺玉林院の茶室装飾の歌
うちたれまつる
この茶室あるじ茶をたのしれかのつの苔はもとりあいらもたりける

好きうまれ人をもうねとうたわるのあらはまて世につるあと乳
谷村好一の病をとふらひて山薬といふ
そのまゝあらはしてと
仙人のあり長いもなるうんたのいのちはたまたまなれ
都につかりまるとき渡雲ぬ一のとき
またうた
むさし一なる名所の郡のたまて君とうたふふの楽さ
近藤好一なり 老ぬまとと草のいのちも

清き名をなとゝゝて立まへるに

うへしのうたゝる

華にうかつまきも清きえうのむいかちもなつかしく君を思ふらん

亀ひらつあなくうきまにちゐしる

うた

萬代をなのあるしにもつのおあきてよろきての空にいなんとおらん

雪中大原女のうた

おくやいし里ふにのくてかへるをかいろきゝろく白きる雪のれ

遠磨のそらを見やわくるまのく

天の原ふりさけ見れは東もなし家のうちも似るあられ

宗任ひと屋のうちにちり我國のと

いかうたをよめるのる

さま出し心の花にちらふれたるありたる梅をいろなかつりもやか

なかのしる水楼よりてそらひ申して

拜たのくのされ　月を池みのおもかけのなるそよりなかりなか

北派のやとりよあつるをよめる歌の中に

かきてあるのねもとにいふ家を堀江川きてなつても月をそなへの礼

佐藤ぬしうつの菊にあへて　心あてにつみ

きんとたるしもいろまさりけり　園の白菊

いとひおこせをるへ

渡りうぬ月うえうの家をへ　そなたもうつの花

三田村をしてとうひもあるもてつちあり

五位の月をいたの日　うたうたなとねも

うちにとたてあり　つまとまきてふうひ

下十一

えゆのて浪高ふへうんとうまこやの

池のあ一の岸そのきそもなきなをたうも

とうたなりまうとあり　書る人

たなうのなりはおきそもはうう川　ゆきそやとうはまりう

信濃伊奈郡園原なる信吉神社あう

たをたうりて　納の哥をあらはる　古杉

二本のかなふもあらはきて

みはうう二本杉いうたうの宮居をうんとう　也　書り

こゝにゆゑありて書うしなひて都にのぼり侍し
うらゝまゐりて今宵の人々なんどに友なる
某のり　帰る日のひとはくゝと日のつはし
はるゝおいなるをうれしうまゐり　とあり侍し
今ひとは和とは日とおもへとあはに父母をとゝやまたらん
潮あゝにあるこの浦にありきるとてき
もゝくゝにあらん風をうつ船のたゝ帆にうる帆よう来てゝ和ゆき
夜のゝ月とゝゝゝゝ月ゝ宿松のゝ来につゝなるあはちしま山

うゝ風に来なるとゝゝゆゝふまはゝよひのとまりいたゝ船をうん
須磨の浦なる保養院みて八景の
えらゝもて歌をゝめきるに来のこゝうゝ
弱なるかとふゝうゝ来たゝゝゝゝうゝ
須磨寺晩鐘
はまゝへのむゝのかゝうに来の日もゝれぬとゝくゝいりあゝのうね
内裏論　夜雨
大宮のむゝのあとゝたつぬらん雨ゝいとゝはなるゝほゝてき法

鐵杨峯暮雪

雪にうもれうちむのびそれをけふのきたる兜のそちふきの山

熊野にまゐりまゐるとき岩代を過るとて

むすぶ水おもかげ〳〵まちのねていそちの松もむなくなりやたぬらん

新宮にまゐりまゐるとき古座といふ

ところより串本にわたりまゐる時

おもかげのあらわれつゝへるとふ鯨のたをたにうる沖つ白なみ

藤代峠より熊野第一の美景なりとの今也

新宮うちむらまで海をへだてゆくもの

響矢用鹿原鹿とよゝまん蕪改なとゝ

こゝろとゝまりて

なりやをてとりふきつらむのうら改くもうゝねさきやいたらん

大内峠より天橋立をうちのゝぞみて

いのたにておひたちもんよりの海ぢなるまに〳〵をゆる杉のむらたち

聖阪の浦より小船にのりて阿久根と

いふところにわたりまゐる時

ちやくのさたまりたるのこまとられをおきのなるまに鏡崎をも過

蒲冠崎をも一きるとき儀といふところ

より海門岳を望みて

市一つねに行くまとられたるところのあやうのあらこそ行きもる

陸奥を下りまる時冠川をわたるとて

なつのれてを誰のかつり川ふそわるるたもを車をいとそとるらん

ゆきちつらにありまるまるる

ふちはらの伊達の大城をたづねるあきの月にまらるなり

近江にあり者のとき

大とつのところの山のまとふまるつ引のとりねの多うちさるまに

十二月二日富田林をたちて我田を

過るまと時雨ふり出ぬ

神なもつのいとをもの寒もふ持てなるらつの家に時雨ふるなり

三月ばかりの夜のやとりにありて人々酒をも

ちとにまるの山のとをくうちふまとて

月さつ一つのをれり

ふるしの遠きむかしのわかれさへおもひやらるゝ月のかげ哉

十三日大神にまうづ左右にたてる大なる

杉の木あまたあるなか衣掛杉二もとの杉と

いふ札をたてたり

これをたちわかるゝに三輪の山なにとなくしたはるゝかな

こよひ初瀬にやどるべしとおもひし

夜あけばおもふほどゆかれず山桜泉の花やちりはてなん

十四日談山神社にまうでんとて道を下りて

橘寺岡寺などを見めぐり飛鳥神社に

まうでて天香山のふもと

これやこの登りにして天皇が國見ましましけん天のかぐやま

十五日五條をたちて御所にいたらんとて

大日坂をこゆるほど雨風いみじう吹きまくりて

車も吹きたふされぬべきこゝちしけるを人々傘

うちかざしてぬれぬれゆくなり

龍神の大日山をこえゆくとなん雨の尾をふむこゝちして

十六日伊所なる六ツて大良に のぼらんとすれば
雨さへ風さへなまぬるく雲さへ入り
ちりぬれば二上山の雲もかくれ宮出と云所
とゝろあるときて
うたゝねに高山おろしさむきこゝもとりて宮出の里
旅宿夢
夢の間に人を待ある宮出の道とゝもおもひきる乳

旅泊

帯なる沖つなみの音あらきに時山のきに入りてみぬる
人の別をおくりまるとき行路柳と
いまこゝろの
笹ちの人は柳のいとなるもきともおくるこゝろもむすばれ侍
留別といふことを
人こゝろふるまなさをの思ふに別をうたきを笹やこなりまり
松波翁の帰京を思ひやりて
あかつきの月をとゝして中ゝ船に家こゝろもつきてこゝみや

憂喜後人

うしとつひとうれしとふもてはつるあるしの人さまくさ芝にあり

理分理とつてふこと

こゝろわりつかにあるべきことをりやうとも歌つもつへなりきり

樵夫

ほそたの薪こゝろん雲のおくにこたふる山もとの春ソ

詠史

上の雲やうたのまつのこゝろねてあたまつのあらしのつらはを

遠山あつ〜ふまたてて滋賀は都の花もつらしを

高松懐古

世のたとにあつたまをたちきりて國のいつらのなをとゝる乳

述懐

うつきこゝろの世をのつ〜とも思ひをあまをたなれ心なりをり

よつたつゝ系才ひとつにあつたなたこゝろをはとも思ふこん

わのこゝろうこゝのたへ〜に高山つたまてのこゝんとまてありとを

獨述懐

うきよの人のたえずふるへるにいそぬ思ひそあるも世なりけり
しづかなる心のおくのかくれ家のたかき思ひを誰かしるらん

家にゐる人のいかなるあした物入袋ひとつ
庭の木どりにうちはてたるをひろひてそれを
ちからなくて反古のうらにかきつけて

ふるあとのこるともかくれたる跡なかくとてもこへりしたのこなりけり
なかなかにあれたる心もおのれのむなしくてこそかうまでもしらん

題しらず

わかのうらに心をよせて拾ひける石をもむかしにとめけらん
高砂の松のしらべをたかさゆなりひなのさはてもあしたつの声
よる浪のおとさへたえて梅ちの松をかきわたる与謝のうら風
まつとりかゆくまにあかしの島まつ浜木の浦もこえわたる哉
家もまたまたもあらぬあら玉のとしをへぬらんもほふいそしちの松
沖つなみわれへたらめこのへたらんなれしるやこのわたりてきた
大方の人のうへ雲の山そたかさのみすのき世をこそあさぬ桃
おくらえ世をわたるひのいさ川たえぬ浪なかのこゆるのおと哉

あまたびたび旅にでなれていつまでもなのあるなきを別るのきり
旅人のぬるもなれ神もなるうもりもりこうるふきこの川の水

雪月花人よりて東京名所をあらはす

あるうもきるとつ雪の国の雪をれは降あなるかるちつをしの池
金彩の松岸の雪の英の紫に雪をあるかりたるうをしのなく
いとうをよりひるうきをあるく波のうへに月をあるれ仏芝の浦
あるしるうあるをしるをたるうをしるをよるうをしるの里

お彩しく京彩の名所を

本の世界のあるかるうをとまるしくの上雪をあるをるを宇治の里人
ひるむうしの山のちかいをを暗川の川のきをよくしるある月のれ
梢まるをしく音羽の滝壷にをるれるもちる山をるるのなの
祇園の花をちまたもうをるまるて雪をつるれのひんのしの山

懐舊

世の中をあるたにをきるをも恋しきをいをきれのうしむのしも也きり
いまのをもむうしあるしをしをも思ひをるてうなをもはるなるうをや

月前懐旧

杉の紫は雪にぬきて笠置山むらのゝ霧に月のこる哉

小金澤神社六百年祭に水郷春望と

いかゝら哉

はるゝゝとむらのゝ雲のきて小金澤川山を遠くたつの居こゝろ

足利義政公の四百年祭に寄杉風懐旧

といふことゝ

天下をこゝろにたゝるいとくの夢はあとゝふ意はまたの愛

香川景樹翁の四十年祭に世路如夢と

あとゝもなきこゝ地よ四へ点よりの巾ハまゝとに笠のこゝふなりきゝ

おなゝゝ二十五年祭に財産思昔といふことゝ

おゝあゝ川思ふのふのきこゝにたゝちのきむらのゝなりきゝ

竹内高壽の十七年忌に春月懐昔といふことゝ

月のきもゝ居こゝはたゝる春の歌ふむらのゝ人はいかゝゆらん

土岐某の十七年忌に帰厝遥といふことゝ

うゝむらたおゝゝのなきを多くれの雲にまれてうゝるかりのね

抜刀隊戦死者の七回忌に

ぬきたまてうちむらゑきんちかつるきうひうゐもうえつ

竹屋春臣の追悼に菊といふことを

うたたねのこの世ハなのへて夢なれやむかしも今のこゝろかなしき

或人の追悼より寄花懐舊といふことを

花のいろもむかしより春ハのこりけりと来てこゝろ人ハあらこそのきる

加多後民の一周年忌より静寂花といふことを

ちりぬるハ人もあらぬ世の中ハうきハ花よりもおきれなりけり

滋岡従長の父の一周年忌に初秋といふことを

思ひあれハたゝ人なつかしきこゝろ秋をハ人やくるしとなるらん

なつかしきこゝろもなれる秋のはゝ思ひなるらん

田中某の母の一周忌より郭公何方といふことを

いたくとゝもとゝられぬ後世の法ときかせ人のかたらへとゝらん

井上某の母の百回忌の手向より

そのをりを思ひつゝきて長のうゑぬ春のひとゝ枝もあり〳〵うゑつゝ

岩倉公の四十日祭に懐旧北一といふことを

なにことも思ひあきめて天の下君をまつ〳〵ゆくへなるうきを

田中某の妻をいたみて

千代までとおもひしかどもたのもしきあきてひとりゆきたるかなしき

哀傷の歌とも

かたらともなりにきてのちさいき路の道をとはまし君のむつき

さいき路の道をとはまことのとはんもわの人いまのなき世なりけり

しらきくの千代のちぎりはむなしくてたのもしかりし君が命き

たまくらのかりの心をたのみしにやなきわかるるかなしさ

さいき路の道のうへよりゆきかへりつゆはらはらあつ〳〵君はも

あかつきの夢やうつゝにたのもしきかの人のこゝろ

さいき路の道をきくにもかなしきかなしさ

きくをとりつゝ川なかのうへにあるものなりなるれり

人のこゝろなむ〳〵になりぬるきくの夢のいたのもしらん

をりにあれてらんる歌とも

うつもおとろく人のなくとも山物のこゝろいたまて枝にあるへき

ねられまもひとりふるまをたひあてのむ酒さらに味ひもなし

いたつらに人のこゝろをまれてこゝろにたのもあれ

中ごろにちかきあらぬ花なりけるをむかふへき時やなりけん
君のたまの國はるかにたちて一つる人のまちとあらはまこそ
雨はやう風もたちのたなかるる松は周にとりて浪のおとに
いとを毎火ふたきわをなつ石火矢のおとにひき海もとりに
白雲はたなまに多年一足引の山はのをは一ふわ落れ
ありとうてなりうんよりもはるなきはなきをもあかと思ふ色ふり
ふ雪ふれとあはいたるもの乳風やひきぬる人やそ一ぬる
つくくと思へいとやー一ふ巾はうなとそ強ぬへのりふ

下廿三

事柳のいとなりもおくりーつをいひとくいとの業をれ
おもふとちのひとつもなくなりて山やまひの産に年わすれぬる

社頭松風

そのつきの久しくうへきいまをなれは松ふるのきも第代の夢

社頭祝

いなはは山ちつまりまして瑞垣のひとすまをを神や守らん

柏木 箱の高野のいとひて

おもふとと思ひたりてもあいとあはひもとあるとひとありまれ

佐々木某の還暦の賀に寄歌祝といへること

[illegible]の[illegible]人なれ[illegible]言葉のあやまきいと[illegible]まてとこのおりてくらん

市岡菊翁の賀に老後栽竹といふことを

[illegible]の[illegible]代の友なりうへ栽てなをよろこびのふしやうそへん

桃園翁の還暦の賀に寄桃祝といへること

さきそめる園まの桃は紅にまさるかとそ神のとみそる

契沖阿闍梨の贈位のをり寄道祝といふこと

[illegible]まの道のひらけとなりにきの君のかきーつりのともしび

杉川庸興古稀の賀に寄杉祝といへること

君[illegible]のもとめのきあたむらん高砂の杉の[illegible]葉の数なり

題しらず

[illegible]の[illegible]ら[illegible]ぬうちのへうちのもうふの芝

[illegible]の代の[illegible]の崎は杉の[illegible]なる沖つしらなみ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鶴契千年

[illegible]

寄亀祝

[illegible]

寄杉祝

[illegible]

[illegible]

寄竹祝

[illegible]

竹契遐年

[illegible]

寄菊祝

[illegible]

寄藤祝

もゝとせまつのそらつたもつてこゝろなるこの君

寄月祝

大君のあとをきつゝ秋のおもみちる月つゝ君をゆきて

寄國祝

神わたなる御國のいとゝ高いつゝ君代まそに

下廿六終

今年六月の末つかた兵庫和武庫郡魚崎村なる
工學士山内規三郎より郵書至る披き見れば其略に
亡父芳秋遺稿の儀に付大坂滋岡氏の御勸めも有之
篤て出版の志も侍て先年高崎松波兩氏の御選
擇を經引續き滋岡氏も詩の原稿と校合の處此節
漸く刊濟仕り付彌出版致度今回更に其寫字
高崎氏へ送り序文を請ひ居侍尚書下にも跋文

若しき題歌の彩を頒ち度云々と乃事なりこは
芳枝君と辰男と交らひの親しう〳〵因みあるべき
義君の桂園の家説に従ひて風を斯道のたらつる
得たりしは則平素の言行に誠実ありて虚偽なの
事一なるべし〳〵さ様なる此誠実を以て廿四年の間を
一日の如くに勤しまれし〳〵官命の事蹟も亦君を知るる
人の為めに要あらんと思つゝ茲に其概略を述んとす

君は弘化四年十月廿三日に生れ童名を信太郎といふ
実父は水上邦武実父は山内邦良二男なりに其妻の
仕丁なり君算術に精しく筆札よろしきを以て
明治元年閏四月公計官に登用せられ次て土木少佑
営繕少佑出納少佑等の諸官に歴任し特に造幣寮の
創置に労ありしを賞して金弐千疋賜ひぬ八年八月
出納寮七等出仕に補せられ九年八月出納権助に任

せらるる翌年一月大藏權少書記官と為り十二年七月
少書記官に轉す十九年三月大藏主計官に任せられし
金庫局大坂出張所長と為る翌月奏任官三等に叙
せられて二等に陞せる廿三年四月政府國庫の
事務を日本銀行に移さるるの時此職となりて日本銀行
大坂支店に入る叙位は西七位より從六位に位を進て
廿四年十月廿五日特旨を以五位に叙せらる爾等初め

六等單光旭日章を授らる後に五等瑞宝章を賜
はる故君是秋病あり十月廿四日危篤に及び後二日
大坂に卒す墓は京都寺之内大宮の東なる西法寺に
在り其在官中常平局國債局總務局備荒儲蓄
課の事務を兼ね又諸府縣の出張巡回等十有三度の
多きに至るかる劇職に居なるも尚世間稚なる世態を
絶て俗務の上に超越し誰の其特神の修養を

嘆賞せざるべからず今年追慕して十七回忌を迎へる

明治四十年の秋　杉浦辰男しるす

去る年秋山内規三ヶ条一毋力自ら戒め家を

さきの草廬をもとめられていそがしく文芸秋なく

ひらけてより七ヶ年に成るまでよみあつめし

言の葉ともを埋木となすもいとをしむるのいとをも

しきすらをもあら垣国小出羽よりおくりて

たびしに筆をよろこびてなほれを心をそへてきし

あたれあのひとうこころをくくして巻頭を世に公

まもることをまきあたとうあかなひてすこし一
巻をとうあく みをうしぬ みるの梅園大人より
ちやくもいひあうをたまひる 兄ハとうかくをの
このへ みたとをうナ今をとうつむとの しる義の
友なる 滋岡徒長ぬ しのこゝろをつくしてあつ
をうしを久間君 傳めしの主 居めしるのにて
歌数おまをる首 俗のなる 高崎御歌所長代

君の点加へたまへるまく 松波資之 笹の瓜をつ
けらしいるとのをやうのをるをとをうをしめ
いとめつゝくをなるうしうおもるのゝの規こ
ぬしつをやゝろなるゝゝろそしてをうや
ようをうひいとをのしまゝよみのうかくつをき主し
つをゝ五百俗巻をなるうをるをを題のついて
なをゝゝゝ二巻をこれの外巻いをゝきをや

と思ひうらんるまつ桂園大人の贈位の
ゆめゝ高崎大人のこゝに来ましかはさら
ま検閲をこいしに芳秋遺稿と名つけくれう
とゝ言をそくるひしをこすかきこいたいに
なもしあのれ芳秋やゝきいたこゝなつるよ
くそれよとひきるとかつてみたのうへおの
うみとあつきたるゝをあるなるやう

きらしなのうへに花くるまあのかきなつるて
うれ遺稿のるようつらひやるなもあるこゝろ
やきるようそゝそゝるむうしれたのるゝにつ
けくひゝこゝかるれむ

明治四十一年四月　須川信行ゝるゝ

明治四拾一年五月十八日印刷
同　年同月廿二日發行

編輯兼發行者　山内規三
京都府葛野郡衣笠村大字大將軍小字方阪六番地

印刷者製本者　山本彦兵衛
京都市上京區寺町通御池上ル上本能寺前町五番戸

（非賣品）